

修身教育における二宮金次郎像普及の意図と

「特別の教科 道徳」

小澤 祥司

民主主義者としてGHQに称揚された二宮金次郎

一九四五年夏、連合国に降伏した日本に、占領軍（GHQ）最高司令官として赴任したダグラス・C・マッカーサーは、朝鮮戦争をめぐる確執から、五〇年四月にトルーマン大統領に解任されて米国にもどった。翌年、彼が連邦議会の公聴会で証言したとき、同じ敗戦国であるドイツを引き合いに出し、現代文明の基準に照らせば、われわれアングロサクソン人やドイツ人が四五歳の大人であるのに対して、日本人は歴史は古いにもかかわらず、一二歳の少年にすぎない、と述べた。

ドイツ人は科学や文化、芸術においても水準が高く、第一次世界大戦敗戦後には近代的で民主的な国家体制を築いたにもかかわらず、ナチスを受け入れ第二次世界大戦を招いた。ただドイツ人は、国際情勢に対する認識も持ち、熟考の挙げ句戦争を起こしたけれども、日本人はそうではなかった、とマッカーサーは語っている。占領政策においても、日本人には、近代国家としてのモデルや基本的な概念、

とくに民主主義というものについて、その原点から教える必要があると、マッカーサーは考えたようだ。

占領軍の最高権力者であったにもかかわらず、退任の際に空港に向かう彼を見送るために、二〇万人の人々が沿道に参集したというほど、日本人の間でマッカーサーの人気は高かった。しかしその発言が日本に伝わると、失望や怒りが広がったという。

そのマッカーサーが率いるGHQによって、「（奴隷解放宣言の）リンカーン元大統領にも匹敵する民主主義者」として評価されたのが、二宮金次郎（尊徳）である。紙幅がないのでこの次第は省略するが、この二宮金次郎に対する評価には、日本を共産主義から守るというGHQのねらいがあったと考えられる。第二次世界大戦終結後まもなく米ソ間の冷戦がはじまり、戦犯の捕縛・処分や財閥の解体などの戦後処理がすむと、今度は日本をあらためて共産主義の防波堤としてつくり直す必要があった。

金次郎は戦前の修身の教科書に繰り返し取り上げられ、